

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別授受承認第六二七号  
明治三十一年十月十日第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)  
平成二十一年一月一日発行(第四百十二卷第一号)

# ホトトギス

一月号



## 俳句随想 〔三百十九〕

汀子

今講演の原稿を書くことに専念している。と言っても毎月の決められた仕事が無くなつた訳ではない。ともかく時間が欲しい。年の後半は募集句の選などが山積みしているし旅も多い。息をするのも惜しまれる時間の遣り繰りは尋常では無いと思ひながら何とか努力をするしか無いのが現実なのである。

虚子没後五十年となる平成二十一年四月八日を中心に財団法人虚子記念文学館では、これまで芦屋で展示してきた『近代俳句の夜明け―子規から虚子へ―』の全てを、横浜の近代文学館に於いて展示開催する。期間は三月七日から四月十九日までで、その間に様々なイベントを計画している。私は講演などを担当する。何故このようなことを取り上げたかと言うことを考えて皆様に見て欲しい。江戸末期から明治初期の俳諧の墮落を憂い、俳句を純粹な文学として取り戻そう、言い換えるならば月並俳句に対するアンチ・テーゼとして俳句革新を唱えたのが子規や虚子の本当の目的であった。現在の俳句も又、虚子が予言したように月並に戻りつつあるような気がしてならない。今一度近代俳句の夜明けを考えて見なければならぬのではないだろうか。

旬日記 汀子

平成二十一年一月五日 菅屋ホトギス会

細造より太白消して初明り  
寒造よりの消息届きけり  
これよりの避寒の旅の待たれたる

一月六日 関西野分会

粥柱吹きてまなざし曇らせし  
獅子舞の脚よりしざりゆきにけり  
仕残せし仕事に年の改る  
いくたびも御慶重ねてをしりこと

一月六日 下萌旬会

仕事なほ残して年の改る  
餅花の揺れ客人の影ゆるる  
久闊を叙してすなはち御慶かな  
悲しみを見せぬが淋し去年今年  
三ヶ日過ぎてたちまち旬日に

一月七日ロイヤル俳壇

さりながら言葉飾らぬ御慶かな  
初髪や白髪美しかりし人  
人日のやがてこぼして雨の朝  
人日を祝へば仕事始動せり  
冬薔薇に実感重ねぬける喜寿

一月八日 大阪倶楽部

悴みてをれぬ予定に従ひて  
待つことも心の余裕松の内  
その仔細聞けば聞くほど悴める

三寒に出掛け四温の家居かな  
一月八日 綿業倶楽部

手ごころは加へぬ気魂歌かるた  
寝正月我に縁なきこととして  
歌留多とる膝の気負ひの並びけり  
ジーパンの膝の加はるうたかるた

一月十日 清交社

たちまちに過ぎゆくことも三ヶ日  
月と星初日に空を明け渡す  
賀状読む時間は別にありにけり  
年玉を待つまなざしと知つてをり

一月十一日 工業倶楽部

又別の会で年賀をくり返す  
予定書き入れて納まる初暦  
過ぎてゆく時間とどめん初暦  
正月の顔の家居となりにけり

一月十五日 有恒倶楽部

風花の消えて大地に届かざる  
寒月に江に込みたる夜の航  
時計ふと見たる日脚の伸びてをり  
これよりは心の余裕日脚伸ぶ  
寒月のこれより満ちてゆけるもの

一月十五日 無名会

寒見舞受けて旅がちなることも  
厳止み濡れて光りぬ滑走路  
いつ間に半月上げて厳止む  
小豆粥祝ひ始動のかゝりけり  
たちまちに旬日過ぎぬ寒見舞

一月十六日 夏潮旬会

一枚の空降らせたる霰かな  
寒肥といふも狭庭でありしか  
恒例の焚火中止の布令となる  
松過ぎてをりし挨拶ふと迷ふ  
暖房に開ききつたる花ばかり  
心まで映されさうに初鏡

たちまちに外の寒さを忘れけり  
一月十五日 年尾先生を偲ぶ会

一月二十日 偲ぶ会 二日目

初旅や二た言三言地震のこと  
東京の寒さ忘れてゆける浜  
御用邸冬あたたかき海を抱き  
潮目又変りて渚春隣

一月二十四日 きさらぎ会

帰路にある雪の予報を聞きしより  
豊かなる寒月に守られて旅  
三寒の家居の時間経ち易く  
初夢の話せば消えてしまふこと  
指先の手入れ三寒四温かな

一月二十六日 時雨会

小豆粥祝うて一人住まひかな  
なすすべもなく雪しまきやり過ぐす  
模様替して春を待つ心かな  
御用邸占めて一劃野水仙  
水仙を活けてその香を纏ひけり

一月二十六日 野分会

粥柱仕事に力加はりぬ  
待春の空を信じて旅路あり  
健康な笑顔集へり春隣

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成二十年一月十日 土筆会

鳥総松老松となる旧家かな  
増上寺人のまばらに鐘冴ゆる  
徳川を偲ぶよすがの寺冴ゆる  
藪柑子こころも富士の一部分

一月十五日 草木瓜会

青木の実とは白銀を寄せつけず  
葉に紛れ空に紛れず青木の実  
屠蘇を酌むより品格といふ日本  
結界を赤く灯して青木の実  
昨夜の星鏤めてぬし青木の実

一月十六日 登高会

早梅の輪郭留め日の沈む  
俳磚の文字袈裟懸けに初鴉  
黒といふ祝ぎの色艶初鴉  
盃派ワイングラス派年酒酌む  
早梅に天より白き試練かな

一月十七日 蕉心会

この雪に阪神淡路偲ぶ朝  
初句会新同人のハイジャンプ  
寒鴉虚しく鳴いて宮の黙  
毛皮着て今日も鯉節ねだる君  
水を舐め冷たき風となつてをり  
摩天楼よご上りたる冬の雲  
寒釣を拒む水位でありにけり  
黒毛皮黒帽心白き人  
彼偲ぶ有楽佗助五合瓶

一月十九、二十日 高濱年尾偲ぶ会

枯芝に皇太子妃のやうな君  
初富士の特等席といふ軋み  
雪女郎グラスの持ち方で判る  
一月二十、二十一日 年寿会

冬うらら戦車のやうに曲るバス

君来れば冷たく橋を揺らす人  
吊橋に腰悴んでゐるあなた  
大島は品川区とや冬霞  
点呼ちやん点呼忘れて日脚伸ぶ  
春近き雲の動きでありにけり

島一つ洗ひ上げたる寒の雨  
例の物見たさに集ふ寒灯下  
熱爛に二人の絆毀れゆく  
一月二十二日 若水句会

石畳音の乾きて寒鴉  
破魔弓や君の心を射止めんと  
寒鴉銀座の朝の物語  
破魔矢受け平家の裔でありにけり  
一月二十三日 目黒学園句会

雪女都心に白き贈り物  
佗助といふしたたかな紅であり  
厳寒に都心固まりゆきにけり  
佗助の一輪挿にある憂ひ  
雪女みちのくの夜は更けやすし  
佗助に黄金の茶室鎮もれり  
厳寒に白きも混りゆく都心

一月二十八日 朝日カルチャー若草句会

初夢を三百六十五日待つ  
四時少し五時には消えし六花  
初夢に極彩色の君が居て  
灰色に都心染めゆく朝の雪  
初夢やレム睡眠の長き君

# 雑詠

## 廣太郎 選

霧の上に霧その上に霧の闇 八尾 岩垣子鹿  
霧といふ破れさうなる包み紙 同  
烏頭人近づけて遠ざけて 同  
六甲はわが俳枕星月夜 神戸 山田弘子  
今日の吾にダリアの赤の重すぎる 同  
暁闇の島の月蝕波の秋 同  
旅かさね来しみちのくは秋涼し 長岡 安原 葉  
みちのくの星見たかりし秋の雨 同  
みちのくの旅を戻れば秋暑し 同  
山繭のみどりは神の色なりし 福山 竹下陶子  
佐比売野の太古の色に月見草 同  
天に地に詩の満ちよと蟬鳴ける 同  
白といふ色を作りて滝と落つ 熱海 嶋田 一步  
噴水に老人多し鳩多し 同  
新幹線ホットコーヒー飲み涼し 同  
ビル住みの吾にもある空盆の月 同  
盆の月育ちて欠けて旅長し 同  
見覚えの顔よ故郷の夜店歩し 同

花芙蓉力を抜きし昼さがり 樫原 稲岡 長  
月影や森かげ模糊となる武蔵 同  
秋暑し微かに水音眠り聞く 同  
さう言へばとんと見掛けぬ蝗捕り 福岡 松尾緑富  
蝗捕り競ひし頃を懐かしぶ 同  
蝗捕り昔話となりにけり 同  
雷神や午前三時の窓打つは 龍ヶ崎 今橋眞理子  
雷烈し地球不安になるほどに 同  
夜のしじま深め雷鳴遠ざかる 同  
信長の夢の玉ほど大き露 東京 大久保白村  
芭蕉の句間違へ涼し老船頭 同  
羽繕ひぬし疲れ鶉の居眠れる 同  
花ねむの道来て札所ねむの花 徳島 上崎暮潮  
老鶯のお札所にあり寿 同  
山冷えも夕かなかなも俄なる 同  
枝豆をつまんで煙草買ひに立つ 香川 湯川 雅  
秋風や淋しい振りをしたりもし 同  
一途なる高さも半端蟬の殻 同  
句帖まだ真つ白といふ涼しさよ 熊本 岩岡中正  
前を行く人の背にある晩夏かな 同  
あるときは鳥になりたき晩夏かな 同  
立ち止まるたびに残暑とぶつかりぬ 神戸 立村霜衣  
鱗てふ光を散らし鯛釣る 同  
弁当は忘れずに来てホ句の秋 同

## 雑詠句評（十二月号より）

昭代・弘子・雅

比奈夫・純也・しげ人

仁義・一步・くに彦

暮潮・廣太郎

先生の手紙行間あたたかし 福知山 大槻右城

作者が先生とお呼びする方は恐らく稲畑汀子先生であろう。ご多忙極まりない先生からのお手紙である。右城氏のご病状を案じてのお見舞も簡潔ではあるが、その一語一語の行間には先生のご厚情が溢れている。病床にありささか気弱になつておられる作者にとつては何よりの慰めであり励ましであつたに違いない。貴重なそのお手紙を幾度も幾度も涙ながらに読み返しておられた事であろう。

然し右城氏は葉餌の甲斐もなく七月二十七日に帰らぬ人となられた。計らずもこの御句に接し追慕の情を新たに「冥福をお祈り申し上げるばかりである。合掌。（昭代）」

二十世紀を代表するピアニストの一人であるホロヴィッツは生前、作品の表現は、音符と音符の間を読む事が大切だ、と言つていた記憶がある。この句の「先生」は、俳句の師か学校の恩師か何れにせよ大切な人からの手紙なのである。正にその行間の暖か

さが伝わってくる。（廣太郎）

闘病の不安抱きつつ梅雨に処す 福知山 大槻秋女

右城氏とともにおしどり俳人として歩んでこられた作者だが、終に今年七月、ご夫君は不帰の人となられた。発病以来、寝食も忘れ、献身的な看病を続けてこられた作者にとつて、その悲しみの深さは計り知れない。医師であられた右城氏は、誰よりも自分の病状を分かつて居られたのかもしれない。淡々とした闘病の日々であつたと聞く。人事を超えた運命を感じておられたのかもしいれない。

梅雨の時期は健康なものでも、心身に不調を来したがちだが、病状の不安を抱きながらの梅雨時の看取は察するに余りある。そんな内面はおくびにも出さずにさりげなく励まし看取を続けられたのである。「闘病の不安抱きつつ」も、努めて明るく振舞つてこられた作者にちがいない。

今はただ、亡き右城氏の心よりのご冥福をお祈りしてやまない。  
（弘子）

巻頭の大槻右城氏は御主人であり、平成二十年七月二十七日に幽明界を異にされた事は御存知の通りである。恐らくその御主人の御恙であろう。梅雨の鬱陶しい日々は、療養中の人は勿論看病される方にとつても心地良い気分ではないのである。それでも一縷の希望を持つ作者の心持ちも見て取れる。（廣太郎）

天地有情

江戸選

星流れ落ちて高原草匂ふ 東京 今井千鶴子  
 消息を待ち仲秋に至りけり 同 稲畑廣太郎  
 八方に清水放ちて富士の黙 同 豊中 瀧 青佳  
 虚子山盧句碑は涼しく苔むして 同 福岡 松尾緑富  
 頭漸く崩れはじめぬ秋の暮 同 同 浅井青陽子  
 仲秋の明月さへも見そびれし 同 宝塚 水田むつみ  
 近頃は籠りがちなる夏瘦せて 同 同 同 安原 葉  
 夏瘦を言はれて細き腕見る 同 同 同 嶋田 一步  
 括られて風を探してゐる芒 同 同 同 嶋田摩耶子  
 はらと音こぼれ末枯れそめし庭 同 同 同 同  
 長かりし残暑も共に語りけり たつの 浅井青陽子  
 何も彼もこころ足らへる夕立居 同 同 同 同  
 けふはまだポケットにある秋扇 長岡 安原 葉  
 わが帰宅寝待月には間に合はず 同 同 同 同  
 桐一葉落ちたることに富士の見え 熱海 嶋田 一步  
 今日も富士見えざることよ茄子を挽ぐ 同 同 同 同  
 札幌は季節先取りななかまど 同 同 同 同  
 木の实拾ふ歩けるうちには歩かねば 同 同 同 同

秋暑し微かに水音眠り聞く 樞原 稲岡 長  
 銅鑼一打響き終りぬ身に入みぬ 同 同 同 同  
 日本のホ句万代に去年今年 福山 竹下陶子  
 神国とあがめし昔明の春 同 同 同 同  
 鱧しやぶや老いゆく先は考へず 徳島 上崎暮潮  
 烈日の恩をもらひて藍茂る 同 同 同 同  
 これをの子これめの子みな兜虫 神戸 後藤比奈夫  
 ゼリーには溺れてをりし兜虫 同 同 同 同  
 面影を風がかもせり籐寝椅子 金沢 藤浦昭代  
 語るとは懐しむこと河鹿宿 同 同 同 同  
 みどり児はことりと睡り秋涼し 神戸 山田弘子  
 風の尾となりて鳴き止む法師蟬 同 同 同 同  
 水遊びしてまだ細きぼんのくぼ 熊本 岩岡中正  
 曝書してあの人もこの人も故人 同 同 同 同  
 言葉てふ露けきものを信じ来し 神戸 長山あや  
 樹に耳を寄せ秋風の声を聴く 同 同 同 同  
 メモ書きの一つづつ消し盆の市 東京 橋本くに彦  
 品ごとに行きつ戻りつ盆の市 同 同 同 同

# 天地有情句評

## 汀子

夏瘦を言はれて細き腕見る 福岡 松尾緑富

現実を見失わない真摯な作者。

はらと音こぼれ末枯れそめし庭 宝塚 水田むつみ

始まる冬への助走。

何も彼もこころ足らへる夕立居 たつの 浅井青陽子

あるがままの作者の心情の推移。

けふはまだポケットにある秋扇 長岡 安原 葉

残暑への備え怠りなく。

桐一葉落ちたることに富士の見え 熱海 嶋田一步

天地存問の秀句。

星流れ落ちて高原草句ふ 東京 今井千鶴子

虚子山廬句碑は涼しく苔むして 東京 稲畑廣太郎

老柳山荘の歲月。

仲秋の明月さへも見そびれし 豊中 瀧 青佳

高齢を語る心に問う。

淋しさからの発見。